

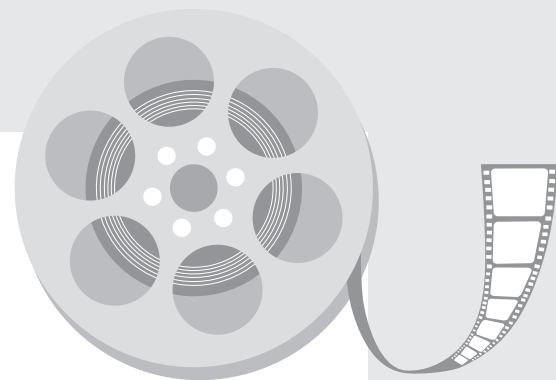
未完のフィリピン革命を問う

『痛ましき謎への子守唄』

(A Lullaby to the Sorrowful Mystery [Hele sa Hiwagang Hapis])

監督：ラヴ・ディアス

2016年／フィリピン／489分



山本 博之

ラヴ・ディアスの8時間に及ぶ長編歴史ドラマ『痛ましき謎への子守唄』は、冒頭、薄暗い部屋で書き物をしている青年の姿で始まる。この人物が何者であって何をしているのかは説明されないが、それは説明の必要がないためだ。薄暗い部屋で青年が書き物をしているとなれば、処刑直前の革命家ホセ・リサルだと思いがちだが（ただし、そう思わせておいて、この人物はリサルではない）。フィリピンには7,000以上の島々に数多くの言葉が存在し、今でも全国民が共通して使える共通語はないと言ってよい。それにもかかわらずフィリピンの人々の間でフィリピン人意識が強い背景の1つに、言葉や文字ではなく図像や芝居によって物語が伝えられてきたことがある。1つ1つの図像や芝居を見たとき、そこに共通の意味を見出すのがフィリピンの人々である。そのような意味を共有していない人にとって、フィリピンの舞台や映画は難しく映ることになる。

『痛ましき謎への子守唄』は、まさにそのような映画だ。観客は、8時間に及ぶ上映時間に耐えられるだけでなく、そこに描かれていることがうまく捉えられるかが問われる。史実・小説・伝承の登場人物が入り混じって登場するが、それぞれの人物についての説明は最小限で、それが誰でどのような人物なのかを観客は常識として知っていることが求められる。また、全編モノクロなので、画面が切り替わったとき、極端に言えば、映っているもののうちどれが背景でどれが人物なのかはすぐにはわからず、しばらくして影が動くところに人がいたとわかったりする。

この作品は、路線対立のためアギナルド一派に山中で粛清された革命指導者ボニファシオの妻グレゴリア（オリヤン）が山中でボニファシオを探すという史実に即した物語と、リサールの小説の登場人物であるイサガニが傷ついたシモウンを運んで叔父のいる山小屋に連れて行くという小説に即した物語の2つが、時

おり交錯しながら並行して進む。ただし、この物語の肝は、この2つの物語を繋ぐ形で描かれる第三の物語である。

この2つの物語を繋ぐのは、リサルであり、総督であり、半人半馬のティクバランである。フィリピンの反乱軍を鎮圧しようとするスペイン人総督は、それを捉えれば世界を支配できると言われる伝承上の巨人ベルナルド・カルピオを捉えようとし、ベルナルド・カルピオを操ることができるのはティクバランだという伝承に従って、ベルナルド・カルピオを捉えるようティクバランに求め、それによってスペイン軍の勝利を手にする。つまり、フィリピン人による革命が成就しないのはフィリピン人がベルナルド・カルピオを捉えることに失敗したためということになる。これは、劇中で描かれるフィリピン革命だけでなく、それ以降フィリピンで今日まで続く未完の革命のことも含意している。

その上で、死を目前にしてティクバランの不死のまじないを求めるカルヨに対して、ティクバランは「ベルナルド・カルピオなんていない。ベルナルド・カルピオは想像の産物だ、現実じゃない」と言い、ベルナルド・カルピオを否定する。不死のまじないの存在を否定され、カルヨは息絶える。これさえ手に入れば全ての問題が最終的に解決するというベルナルド・カルピオは存在しないということだ。そうだとすれば、フィリピン革命が未完のままであることはどのように考えればよいのか。

イサガニは、劇中でバシリョやシモウンや神父と問答を重ねる。とりわけ物語の結末近くでの神父との問答では、「なぜ」で始まる多くの疑問を神父にぶつける。それらは劇中ではフィリピン革命期に関する疑問だが、しだいに100年後の今日のフィリピンにも通用する疑問となり、解決しない謎が重ねられていく。

タイトルの『痛ましき謎への子守唄』は、言葉を補っ

て意識すると、「答えの見つからない悲しみに満ちた疑問に向けられた子守唄」だろうか。冒頭で恋人に捧げられた求婚歌は、個人の経験に基づく物語をしいに織り込みながら国民的な革命歌になっていく。

物語の冒頭で、『ノリ』の冒頭に処刑されたゴンブルサの3神父のことを忘れるなど書かれていたことが言及される。そのことを『ノリ』に書いたりサルは、ゴンブルサと同じ場所で処刑される運命を辿った。この作品の冒頭でリサールのことを忘れるなど描いた

ことは、リサールが『ノリ』や『フィリ』で行おうとしたことを映画で受け継ぐという表明である。劇中に、マニラではじめて映画が紹介され、観客がスクリーンの様子を見て驚いて逃げ出し、それを見てティクバランたちが笑う場面がある。その後もティクバランは何度かカメラをのぞく様子を見せる。この作品の観客はマニラの最初の映画の観客と同じで、神出鬼没のティクバランを媒介として、スクリーンの中の出来事とながっているのである。

『痛ましき謎への子守唄』作品情報

作成：山本 博之

背景知識

フィリピンで生まれ育った人なら誰でも知っているもので劇中ではまったく説明されないが、理解しないと物語が十分に理解できない人名などに以下のものがある。

- ホセ・リサールによる2冊の小説『ノリ・メ・タンヘレ』（『ノリ』）¹⁾と『エル・フィリプステリスモ』（『フィリ』）²⁾の主な登場人物……シモウン（クリソストモ・イバラ）³⁾、イサガニ⁴⁾、バシリヨ⁵⁾
- ホセ・リサールの処刑……ゴンブルサ⁶⁾、ホセ・リ

- 1) 日本語訳はホセ・リサール著（岩崎玄訳）『ノリ・メ・タンヘレ わが祖国に捧げる』（フィリピン叢書1、井村文化事業社、1976年）。
- 2) 日本語訳はホセ・リサール著（岩崎玄訳）『反逆・暴力・革命 エル・フィリプステリスモ』（フィリピン叢書3、井村文化事業社、1976年）。以下の人物紹介は『ノリ』と『フィリ』の日本語訳による。
- 3) シモウンは『フィリ』の登場人物。巨万の富を持つ宝石商。総督を操って致富に専念していると思われるが、実は恐るべきテロリスト。植民地政府要人を一気に爆死させて革命を成功させようとするが、不思議な運命で完全に失敗する。その正体は『ノリ』のクリソストモ・イバラ。
- 4) イサガニは『フィリ』の登場人物。まじめ人間。パウリタ・ゴメスの恋人だが、パウリタはホワニト・ペラエスに乗り換える。イサガニは彼女のことが忘れられず、彼女を助けようとして偶然シモウンの革命を無にしてしまう。
- 5) バシリヨは『ノリ』と『フィリ』の登場人物。『ノリ』では侍祭。後にマニラに出て大学で医学を学び、卒業予定の年になる。最後には革命に加担する。
- 6) ゴンブルサはフィリピンに実在した3人の在俗神父マリアノ・ゴメス（1799-1872）、ホセ・ブルゴス（1837-1872）、ジャシント・サモラ（1835-1872）の姓の第一音節を繋げたもの。3人はフィリピン人司祭を認めないカトリック教会を批判して教会改革運動を指導したが、1872年1月に軍港カビテで起こった労働者の暴動事件を煽動したとして同年2月17日に処刑された。

サル⁷⁾

- フィリピン革命とカティプナン……アンドレス・ボニファシオ⁸⁾、グレゴリア・デ・ヘスス（オリヤン）⁹⁾、プロコピオ・ボニファシオ¹⁰⁾、エミリオ・アギナルド¹¹⁾

- 7) ホセ・リサールは実在の人物（1861-1896）。フィリピンの革命家、医師、著作家、画家、学者。1882年にスペインに留学し、フランスとドイツを経由して1887年に帰国。ドイツ滞在中の1887年に出版した小説『ノリ・メ・タンヘレ』が反植民地的だと批判されたために再びヨーロッパへ。ベルギー滞在中の1891年に小説『エル・フィリプステリスモ』を出版。1892年に帰国すると植民地当局によってミンダナオ島に流刑される。流刑を終えた1896年、任地のキューバに向かった船上で逮捕され、同年12月30日にマニラで銃殺された。処刑の前の晩に妹に託した辞世の詩は『ミ・ウルティモ・アディオス』として知られる。
- 8) アンドレス・ボニファシオは実在の人物（1863-1897）。フィリピンの独立運動家・革命家。マニラのトンド地区の貧民層出身。29歳のときにグレゴリア・デ・ヘスス（当時18歳）と結婚。1892年にスペインからの独立を目指す秘密結社カティプナンを創設、1895年に最高指導者になり、エミリオ・ジャシントらと勢力拡大につとめた。1896年8月に武装蜂起。地方役人層のアギナルドと路線対立を起こし、袂を分かって独自の革命を進めようとしたが、アギナルドに逮捕され、1897年5月10日に処刑された。自分で動けないほど衰弱した状態で、弟のプロコピオとともにナグパトン山で銃殺されたと考えられている。享年34歳。
- 9) グレゴリア・デ・ヘススは実在の人物（1875-1943）。愛称オリヤン。秘密結社カティプナンの女性部門の副部門長。
- 10) プロコピオ・ボニファシオは実在の人物（1873-1897）。アンドレス・ボニファシオの弟。アギナルド派と別れてマニラに向かう途中、リンボン滞在中にアギナルド派のボンゾンらに襲われた。アンドレスとともに捕らえられ、はじめナイフ、後にマラゴンドンに連行され、アギナルドらによって有罪判決を受けて銃殺された。享年24歳。
- 11) エミリオ・アギナルドは実在の人物（1869-1964）。フィリピンの革命家。フィリピン第一共和国の初代大統領（1899-1901）。1895年にカティプナンに参加。1896年のカティプナンの武装蜂起では独自の軍を編成してカビテ州を武力解放した。1897年にスペイン軍がカビテ州に総攻撃をかけてカティプナンが敗走したとき、ボニファシオを銃殺刑に処してカティプナンの主導権を握った。その後、スペイン軍と交戦を続ける一方でマニラの弁護士ベドロ・パテルノの仲介でスペイン当局と和平協定を調印、同年12月に香港に到着した。